

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

松浦 光

2022年は修辞学にとって、多岐に渡る研究成果に恵まれた1年であると言える。各学会でレトリックをテーマにした研究報告が盛んに行われた。表現学会 第59回全国大会(於 京都橘大学)においても、シンポジウム「比喩の身体性と知性」(登壇者:野田大志氏・小松原哲太氏・鷺見幸美氏・西山秀人氏)が開催された。本シンポジウムでは「比喩」における「身体性」と「知性」の位置づけについて、認知言語学・日本語教育学・日本文学というそれぞれの分野から議論が行われた。各氏の論考は『表現研究』第116号にまとめられている。また、2019年末から続くコロナ禍における言語表現についても研究対象となり、その実態を後世に伝える言語資料にもなり得るだろう。『日本語学』第41巻第3号秋号(明治書院)で組まれた特集「コロナが変えた日本語」も時代を反映したものとなっている。梶原彩子・陳帥・松浦光・菊地礼「新型コロナウイルスに対する百科事典的知識の形成—「ウィズコロナ」「アフターコロナ」の用法拡大の考察から—」(『表現研究』115)では「ウィズコロナ」「アフターコロナ」の二語を取り上げ、新型コロナウイルスに関する社会的出来事から百科事典的知識の形成と変容について記述されている。小松原哲太「矛盾する比喩と社会的葛藤—日本語における「コロナ禍」の概念メタファーの不和—」(『社会言語科学』25(1))は概念メタファーから、商売を営む事業従事者は「コロナと戦う」ために営業を自粛するか「生き残る」ために営業を継続するかに関しての葛藤が論じられている。さらに、本年はレトリックを再考・整理する研究が積極的に行われた。むだ口にみられる擬人法あるいは誇張法を指摘した粕山洋介「ことば遊びとレトリック—日本語のむだ口を中心に—」(『認知言語学研究』7)、コーパスを用いて直喩の程度表現としての働きを実証的に提示した菊地礼「直喩における程度表現の働き」(『表現研究』115)、プライマリー・メタファーはじめ身体性と言葉の関係を論じた沖本正憲『東京は砂漠なのか—メタファーからことばを考える』(三恵社)などに、新たな知見を見出すことができる。

今後の修辞学の展望としても、レトリックの定説が見直され、発展に向けて議論されていくだろう。特に、佐藤信夫の一連の研究は重要な位置を占める。菅井三実・八木橋宏男(編)『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集』(開拓社)の中の一編である森雄一「埋もれた名著 高部伸夫著『広告コピーのレトリック その発想と表現技術』を読む」では、佐藤の別名義である高部伸夫の1966年の著書の概略を示し、佐藤のレトリック論の展開が考察されている。瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明(編著)『[例解] 現代レトリック事典』(大修館書店)も、文学作品をはじめ漫画や広告など幅広い実例に基づきレトリックを「意味のあや」「形式のあや」「思考のあや」から分類を試みた1冊である。「本書は、日本で最初のレトリシャン佐藤信夫(1932-93)の学問的遺産を受け継いで自由に発展させたレトリック事典です。」(同上: 584)という「あとがき」からも佐藤の影響がうかがえるのも興味深い。(横浜国立大学(非))